まだ生まれ来ぬ子孫を守れるのは 今、生きている我々自身

大阪大学名誉教授 野村 大成

7月末、林勝彦氏から福島原発事故に関し、京都フォーラムでの講演を依頼された。原発事故に関する講演依頼とメディアの要請は、安全を強要するものが多くすべて拒否していたが、林氏が「言いたい放題に言ってくれた方がよい」とのことだったので引き受けた。8月に入り、案内を頂いた時、「公共」という文字を見つけ一瞬身構えた。公共、国、公益という名目のもとに、いかに多くの犠牲者を出したか計り知れない。開催の前日になりフォーラムの事務局に問い合わせたところ、哲学、地学、NGO等いろんな分野から40数名が集まり、フリーディスカッションするとのことでした。初日は欠席し、夜半よりスライドと資料作りに専念し、やっと2日目の朝7時半になんとか用意できたので、会場にタクシーで駆けつけた。

2日目は、「福島原発事故を公共哲学する」ことであった。科学ジャーナリスト、元知事、JCO事故を救った住田先生の講演があり、討論が活発に行われ、途切れる時間もなく座長は打ち切るのに難儀していた。驚くべきことは、私が言いたい放題言ってやると身構えていたことを演者、討論者に先に言われてしまい、手も挙げられない状態であった。まさに善意、良心の塊のような発言がつづき、これでは討論にならないとも思った。そのうち、私の順番となり、「微量放射線の人体に与える影響」という事務局より与えられた題目で講演を始めた。〈問われる安全の哲学―良心〉というサブタイトルをつけた。原子力行政に対しては公共の哲学ではなく、〝安全の哲学〟という不可侵の哲学が必要であることを身で感じていたからである。

放射線の人体に与える影響は、歴史的、科学的事実に基づき、国際機関の勧告等を受け入れ規制してきた。放射線等のヒトへのリスクの約8割を占めるのが癌（2007年勧告では9割5分）であり、〝直ちの影響〟ではなく、数十年後に発生し、被ばく線量に対し直線的に増加する致死がんのリスクで決められている。ヒトでは100mSv以下で有意の増加の証拠がない。即ち〝微量放射線〟は科学的には未知の世界でもある。従って、国民の健康のために、より安全を保つようLNT（直線しきい値なし）モデルで、被ばく線量限度を決めた。御存じのように、公衆は1mSv、職業被ばくは20mSv／年（5年平均、1年最大50mSv）である。

このたびの東北大震災、特に福島原発事故に際しては、政府、メディア、それを取り巻く識者の発表には、Chernobyl、Sellafield、JCO事故等の経験は全く反映されておらず、長らく〝放射線の人体影響〟を研究してきた私には耐えがたい屈辱感があった。排出量、汚染濃度を示さず、〝直ちに健康に影響はない〟（少なくとも1000mSv以上でなければ直ちの影響は起こらない。放射線審議会のいう下血などは10000mSv以上）の政府、放射線審議会等の発表に終始し、大手メディア、学者までもがこれに追従、チェルノブイリ、JCOの経験者、原子炉工学、人体影響のエキスパートの名もみなかった。私は知らないが、戦前の情報統制とはこのようなものであったのか。原子力の安全神話のもとに、如何にしてこのような社会制度を築き上げたのか、公共哲学は検証しなければならない。

テレビ、新聞等の取材は、すべて拒否していたが、事故後1週間がたち、某通信社に放射線を知る旧友が残っていたので、思い切ってメモを送った。また、5月下旬には、衆院の震災対策プロジェクトチームの代表より講演依頼があり、〝言いたい放題言う〟を条件に引き受けたぐらいである。今回、分野を超えて〝安全の哲学〟を理解して頂く機会がもてたのは幸せだった。この言葉は、原子力の安全神話？（特に省庁再編後）のもとに原子力の安全性を審査する委員会（放射線審議会、原子力委員会、原子力安全委員会、原子力安全・保安院等）の〝独立委員会〟としての機能が失われたことにより、もんじゅ事故（1995年）、JCO事故（1999年）が続いた時に、未来の不安について言った言葉である。これは原子力に限ったことではないことは、翌22日の講演、討議を聞くとよくわかる。公害（鉱毒、有機水銀）でも同じことであった。箕浦教授は紀元前以来の津波被害の歴史を地質学的に解析し、今回の津波災害を予測した見事なデータを拝見した。まさに〝目からうろこ〟という状態で、住田先生いわく、〝10年前にこの事実を原子力委員会が知らされていたら、大震災、少なくとも原発事故は予防できた〟。自然災害、公害、原子力事故、全てにおいて多くの歴史的事故の証拠、記載が残っている。予知していながら、人類は災害を防止できなかったのか。

その本質を公共哲学は探る必要がある。原子力に関しては、原子力推進機関の中に安全委員会（原子力安全保安院）をおき、安全審査の独立機能をなくし、原子炉は安全とばかりに、国は東大を除き原子力工学を廃止した。また、原子力の人体影響を研究する放射線基礎医学講座も研究費のためなのか大阪大学を除いて自然消滅した。工、医ともに安全性の教育、研究の場を日本はなくしたわけである。これでは、原子力関係の事故が頻発したのも当然の結果である。なのに学者を含め、市民は誰も異議を唱えなかった。

ここではたと気付いたのは、いくら歴史的事実が存在しても、これを受け入れるのは人であり、その人を決めるのは誰であるかにより安全性は大きく揺らぐ。安全性に関しては、各省庁、企業の利害関係で決めるものでない。

私が環境、次世代研究の序文に必ず使う言葉がある。〝科学の進歩により、人類は多くの恩恵を受けた。それと引き換えに、地球環境は破壊され、この地に生を受けたか弱き生きものに多くの障害をもたらした。それを予知し、防御するのも人類文明の進歩でなくてはならない〟。また、〝まだ生まれ来ぬ子孫を守れるのは、今生きている我々自身である〟。

講演、討議に参加して、私のエッセイのタイトルを思い出し、講演の時に急遽配布した。英国セラフィールドにある核物質再処理工場（青森の六ヶ所村と同じ）の従業員の子供に白血病が多発すると、Gardner教授が発表（1990年）した。私の昔の研究（Nature, 1982）が主として引用されたので、Nature誌より依頼を受け論文を書いた。その論文に思いもしなかったタイトルがつけられていた。〝Of Mice and Men〟である（1990）。これはスコットランドの農民詩人Robert Burnsが、1785年11月の朝、畑を耕していて誤って二十日ネズミ（マウス）の巣を壊してしまった時にしたためた詩である。概略を以下に記した。

マウスに寄せて（英語原文）

"To a Mouse", on turning her up
in her Nest, with the Plough,
November, 1785

I'm truly sorry Man's dominion
Has broken Nature's social union,
An' justifies th' ill opinion,
Which makes thee startle,
At me, thy poor, earth-born companion,
An' fellow-mortal!

The best laid schemes o' Mice an' Men
Gang aft a-gley,
An' lea'e us nought but grief an' pain,
For promis'd joy!

An' forward, tho' I canna see,
I guess an' fear!

Robert Burns

マウスに寄せて
―心地よい巣穴から
鋤で掘り起こしてしまった
1785年11月

俺は悲しくてならぬ―
人間どもがのさばって
自然界の互いの結び付きを
壊してしまったのが。
評判がひどく悪いのも
無理はない。
だからこそ
おまえは俺を見て、
びっくりしたのだ。
この地球上に生を享けた
命限りある
哀れな仲間同士なのに。
マウスにせよ、人間にせよ、
周到に立てた計画が
しばしば思った通りには
ならず
あてにした悦びにかわって、
悲しみと苦しみだけが
残るのだ。
そして未来には―
はっきりとは見えぬが―
恐ろしいことを予感するのだ。

ロバート・バーンズ

当時、この世で最も小さな（か弱い）哺乳動物はマウスといわれていた。産業革命がもたらす障害をうたった詩である。この〝Mice and Men〟はWordsworth、Steinbeck、そして私の論文のタイトルにつけられた。環境保護の標語にも使われた。何故、人類は過ちを繰り返そうとするのか。歴史的事実、科学的事実が役立たなかったとすれば、今この地に生を受けた我々が、次世代のために対策をなしとげなければならないことを意味する。

第104回公共哲学京都フォーラム「東日本大震災を公共哲学する」

日時：2011年8月20日(土)・21日(日)・22日(月)
場所：神戸ポートピアホテル　本館地下1F　生田の間

（敬称略）

○8月20日(土)

1. 日本の今昔(ソクサル)(内肌)
   李秉用　LEE Byung Yong（写真作家）
2. 公共性を模索する宗教―東日本大震災後の動向
   木村敏明（東北大学大学院文学研究科准教授）
3. 災害と外国人―母国に「逃げる」ことを中心に―
   郭基煥（東北学院大学経済学部准教授）
4. 公共哲学としての災害モニュメント
   ―東北関東大震災被災地を世界遺産に
   芳賀満（東北大学高等教育開発推進センター教授）
5. ボランティアを通して見えてきた「復幸」のキーワード
   児島永作（復幸連絡会研究員）

○8月21日(日)

6. 科学報道を検証する
   柴田鉄治（科学ジャーナリスト）
7. 原発と地方自治
   佐藤栄佐久（元福島県知事）
8. 今後の原子力規制機構のあり方
   住田健二（元原子力安全委員会委員長代理／大阪大学名誉教授）
9. 微量放射線の人体に与える影響　問われる安全の哲学；良心
   野村大成（大阪大学名誉教授）
10. 脱原発は可能か
    林勝彦（元NHKエンタープライズ21 EXプロデューサー）